

明解  
國語辭典

改訂版

金田一京助監修

文学博士 金田一京助監修

明解国語辞典

改訂版

三省堂

# 明解国語辞典

(改訂版)

定価 430 円

昭和 27 年 4 月 5 日 改訂初版発行  
昭和 37 年 8 月 1 日 改訂 91 版発行

発行所

東京都千代田区神田神保町一の一  
株式会社 三省堂

電話東京(291)一一二六一九  
振替口座東京五四三〇〇

印刷者

東京都三鷹市上連雀九九〇  
株式会社 三省堂三鷹工場

代表者 小倉正風

発行者

株式会社 三省堂

代表者 小倉正風

編集代表

金田 一 京助

複製本 (改訂明国)

(商標登録番号 第 379783 号)

(実用新案登録番号 第 446266 号)

## 改訂版の序

明解国語辞典がはじめて世に出てから、早くも九年の年月が流れていた。その間に、意外の好評を得て、数十万の愛用家を見いだしたことは編者の感銘おかないところである。

しかるに、この九年は、年月としては、そう大した長年月でもないのに、われ々の国は、建国以来の大きな衝撃を経験した。言語は、国家社会の反映であるので、この歴史的な大変革の間に、また大きな動揺があり、旧版のまゝでは、明解国語辞典も、時代にそぐわなくなるおそれを生じた。初版を出して以来、新らしい辞書学に心をひそめて久しく検討中だった編者等は、読者の愛顧にむくいるために、こゝに構想を新たに、戦後の改訂版を世に送ることとなったのである。

言語の数は巨万に上り、その変化は無窮であるから、辞書は、大きければ大きいほど備わり、小型辞典の悲しさは、常に、尽しがたい点にある。しかし、大きい備わった辞典は、毎日の用には、かえって不便である。忙しい日常の間に、国民の片手にのってすぐに間に

合う小型のよい辞典は、また別にぜひとも必要なのである。国語の標準的な辞典の不足を感ずる中、本書は、そういう用に立つために、まず複雑多様な現代語の現実を如実に反映させて、しかも、もつとも正しくこれを把握した、もつとも手ごろな辞典である。すなわち、漢語・文語・古語・外来語なども、現代語の立場から正しく位置づけ、現代にやくだたない語をば大幅に整理するとともに、現代にやくだち現代の言語生活の実際にあずかる最近の語は、大辞典よりも豊富に包容し、今までのあらゆる辞書の盲点を補修して、十分新らしい世代に生きてやくに立つように編んだものである。今回、特に助辞・接辞・語釈の用例にまでアクセントをつけたこともそのつもりにはかならない。どうか大方の清覧を待つ次第である。

この大辞典、半日さして、予て大辞典を編むつもりで、この大辞典の編むに、この昭和二十七年二月十一日、東京、金田一、京助、意

このたび、表紙その他の体裁を一新したのを好機として、付録に若干の増補をくわえ、一層使

用上の便宜をはかった。

昭和三十一年五月

## この辞書のつかいかた

この辞書をじょうずにつかうためには、次の方針・約束をぜひ読んでください。

## 一 見出し語

## 1 表記法

(1) 国語(漢語を含む)はひらがなで、外来語はカタカナで示した。文脈が不明な場合は、**カタカナ**で示した。

(2) 徹底的な表音式である。現代かなづかいとは必ずしも一致しない。

(イ) 長音は符号「ー」のかわりにすべて「あ・い・う・え・お・ア・イ・ウ・エ・オ」であらわす。  
 【例】「カード・シート・ケーキ・ソース」、「おうい(王位)・こうり(行李)」などは「カード・シート・ケエキ・ソオス」、「おおい・こおり」などのようにあらわした。

(ロ) 「ぢ・づ・ヂ・ヅ」は、すべて「じ・ず・ジ・ズ」であらわす。

【例】「ちぢむ(縮)・つづく(続)・きづく(気付)」も「ちじむ・つづく・きづく」のようにあらわした。

(3) が行の音が、ことばの終りや中に来ると、鼻にぬける、やわらかな感じの音となることがある。このような、いわゆる、が行鼻音をあらわす特別な符号を使用した。

【例】「かぎ(鍵)・オルガン」などを「かぎ・オルガン」などのようにあらわした。

(4) 活用語の間にある「・」は語幹と語尾とを区別するしるしである。

(一) は、省略した形ともとの形とを同時に示すためのしるしである。

(二) は、清濁など、ほとんどおなじふたつの形を、一ぺんに示すための符号である。

これらはみな、スペエス儉約のためにつかっただけのものである。

【例】 あぐり(あみ) || あぐり・あぐりあみ。たい(だい)が ん || たいが ん・だいが ん

## 2 配列

配列は五十音順によったが、同じかなのことばがつづく時は次の方針に従った。

- (1) つまる音をあらわすための「つ・ツ」や、よう(拗)音をあらわすための「や・ゆ・よ・ヤ・ユ・ヨ」、外来語をあらわすための「ア・イ・エ」などの小字は、いわゆる直音ちよくおんをあらわすかなの前にならべた。

(2) いわゆる清濁については清音・濁音・半濁音の順にならべた。

(3) ことばの構成については、接辞・造語成分を前に、単語を次に、連語を最後にならべた。

(4) ことばの種類については、和語・漢語・外来語の順にならべた。

(5) 品詞の区別については、名詞・動詞・形容詞・形容動詞を前に、副詞・連体詞・接統詞・感動詞を次に、助詞・助動詞を最後にならべた。

(6) 同じ品詞の中では見出し漢字の字画順にならべた。

## 二 見出し語と語釈との間にある諸種の説明

1 見出し語のすぐ下に○でかこんで出したのはアクセント記号である。助詞・助動詞・接辞・造語成分にはロオマ字を、それ以外のことばにはアラビヤ数字を○でかこんである。くわしいことは別項「アクセント解説」に記してある。

なお、アクセント記号は右のほか、動詞・形容詞の最後に示した文語形や、見出し語として出さない同意語・用語例などにもなるべく多くつけるようにした。

2 [A]和語・漢語に対しては普通つかっている漢字をアクセント記号の次に「」でかこんで示した。この見出し漢字については次の約束がある。

(1) 漢字の上についているへは、それが当用漢字表にないこと、へは、当用漢字表にはあるが、音訓表にのせる音訓と一致しないことを示す。これらのしるしはすぐ下の一字に対してだけ適用される。二字以上同じことを示すばあいはへ・へ・へでつつんだ。

(2) 漢字の上についている「:」は、従来、あて字と考えられたものにつけたが、なお、そのほか

に、二字以上の熟語の字面が国語の語順と一致しないもの・漢文訓読式にひっきりかえってよむもの・いわゆる難訓・代用漢字の一部などにもひろくつけるようにした。

●は下のすべての漢字に対して適用する。||はそこで、あて字的な用法が終わったことを示す。●のばあいにはへ・へのしるしを付けない。

(3) 見出し漢字の中、当用漢字と関係あるものはすべて新字体・略体で示したが、古い字体もなるべく多く( )につつんで示すようにした。

(4) 送りがない中、普通余り送らない習慣のあるものは、( )につつんで示すようにした。

[B] 外来語のばあいは、カタカナ・漢字の略号でそれぞれの国語名を、また、漢字で品詞を示し、次に原語のつづりを、分かった範囲内で載せ、なお、あわせて漢字をあてる慣用のあるものはそれをも附記した。

ただし、品詞の大部分をしめる名詞については特別のばあいの外は記さず、また、英語も名詞以外のばあいにだけそれをするすというように、スペエスの儉約をはかった。

3 見出し漢字の下にカタカナで示したのは、見出しのかなと一致しない現代かなづかい、および、歴史的かなづかいである。

( )でかこんだのは歴史的かなづかい、かこまないのは現代かなづかいである。しかし、両者が一致しているばあいは、現代かなづかいだけを出した。

なお、歴史的かなづかいは和語についてだけ出した。漢語については特別のばあいをのぞいては、すべて省略した。

4 品詞は、かなづかいの下に( )でかこんで示した。かなづかいを記さないものについては漢字のすぐ下に同じ方法で示した。

品詞の中で、特に注意を必要とするものは次の通りである。

(1) (形動ダ)は口語の形容動詞である。見出し語にあげたのは語幹だけであるから、これに「ダ・ナ・ニ」などの語尾をつければ、実際のことばとしてつかうことができる。

〔形動タルト〕は多く文章語につかわれるもので、「堂堂たる」とか「堂堂と(して)」「というよ  
うな用法しか持っていない不完全な形容動詞である。

〔形動タリ〕・〔形動ナリ〕は純然たる文語の形容動詞であり、ごく少数にだけ記した。

(2) 〔補助・下一〕は、動詞の中の形式的用法を特に補助動詞と考えたものである。

(3) 〔造語〕は造語成分を意味する。これは接辞とはなりきっていないもので、しかも単語とは認  
めにくい一類をすべてこの中にふくめた。

(4) 〔名・自他サ〕は、名詞の用法のほか、語尾「する」をつければ自由にサ行変格の自動詞・他  
動詞としてつかえることばにつけた。

(5) 〔連語〕は複合度の緊密でない複合語・単語以上のあつかいを受けるもの、「まくらことば」お  
よび、従来、句・成句といわれた一類をさす。連語にもつとめて品詞を記した。

(6) 助詞の分類は単純化して、次の四つにした。

格助詞 が・の・に・を……………

修飾助詞 は・も・さえ・だけ……………

接続助詞 から・ので・ば……………

感動助詞 さ・な・あ・ね・よ……………

5 品詞の下に「古」「文」「俗」「方」「女」「児」などと「目」でかこんだのは、そのことばのつか  
われる特殊な場面、いわゆる、位相の別を示したものである。「文」については、「あとがき」の中  
で簡単な説明を加えた。

### 三 語 釈

1 簡潔な文章、論理的な表現、しかもなめらかな口調をたてまえとし、また、なるべく用例、同  
意語、反対語、文語形などを多く挙げて、そのことばの用法を示すことにつとめた。

2 極力、当用漢字・新字体・現代かなづかいで統一することにつとめた。当用漢字以外の字をつか  
うときは、原則として、ことばをひらがなで先に書き、次に漢字を( )につつんで示す方針に

従った。なお、当用漢字でもよみややすくするために特にカタカナを( )につつんでよみかたを示したものが多い。

3 送りがなについては、本書は国語教科書の送りがななどのように、なるべく多く送る方式に従った。ただし、複合語については多少簡略にしたところがある。

4 文章の簡易化とスペエスの節約とをはかるために次の記号をつかった。

↓ を見よ

↑ を略した

↓!! を参照せよ

↕ 反対語

・ および・や

あぶらめ③(名)〔動〕↓あいなめ。  
がいろく④(名)↑街頭録音⑤  
か①〔彼〕(代)…。↓かわたれどき。  
かんぶつ②〔官物〕(名)…。(↓私物)  
かんぬき④②〔門〕(名)〔…〕門・戸をしっかりしめるための横木。||門や戸を…

( ) または

かんばん①〔看板〕(名) ⊖商家の店先・(興行物の小屋の前)に掲げて…||商家の店先または興行物の小屋の前に掲げて…

( ) または

きかん①〔帰還〕(名・自サ) (戦地から)かえること。||かえること。または、戦地からかえること。

┌

└

┌

└

語源・字源・用字法の指示および、補説につかう。  
用語・用例をさらに説明するはあいにつかう。

5 語釈の最後に㊦として出したのは大部分が動詞・形容詞の文語形であるが、ごく少数はいわゆる雅語・文語の形を特に示すばあいにもつかった。なお、( )でつつんだ文語形は、その発音が口語形とかけはなれていることを特に示したものである。

なお、このほか、参照語を( )でつつんだのも同じ意味である。

# 略語表

(配列は五十音順)

## 品詞

- (格助) 格助詞
- (感) 感動詞
- (感動) 感動助詞
- (形) 形容詞
- (形動) 形容動詞
- (自) 自動詞
- (修助) 修飾助詞
- (助動) 助動詞
- (数) 数詞
- (接) 接統詞
- (接助) 接統助詞
- (接頭) 接頭辞
- (接尾) 接尾辞
- (造語) 造語成分
- (他) 他動詞
- (代) 代名詞
- (動) 動詞
- (副) 副詞
- (補助) 補助動詞
- (名) 名詞
- (連語) 連語
- (連体) 連体詞

## 活用

- (九) カ行変格活用
- (上二) 上一段活用
- (上三) 上二段活用〔文語だけ〕

〔外来語の原語だけ〕

## 外来語

- イ イタリヤ語
- 英 英語
- オ オランダ語
- ギ 古典ギリシャ語
- サ サンスクリット語
- シ シナ語〔現代中国語〕
- ス スペイン語

〔ぼん(梵)語〕

- (ク) 〔形容詞の〕ク活用
- (サ) サ行変格活用
- (四) 四段活用
- (シク) 〔形容詞の〕シク活用
- (下二) 下一段活用
- (タ) 下二段活用〔文語だけ〕
- (タリ) 〔形容動詞の〕タ型活用
- (タルト) 〔文語形容動詞の〕タリ型活用〔タルト型形容動詞の文語形〕
- (特殊) 〔形容動詞の〕タルト型活用
- (ナ) 助動詞のうち特殊な活用をするもの
- (ナリ) ナ行変格活用〔文語だけ〕
- (エ) 〔文語形容動詞の〕ナリ型活用〔タ型形容動詞の文語形〕
- (ラ) ラ行変格活用〔文語だけ〕

〔注意〕 助動詞・接尾辞の活用は、右から類推して、(下一型) (四型)のように、「型」をつけて示す。

## 位相語〔特殊用語〕

- 鮮 朝鮮語
- ド ドイツ語
- フ フランス語
- 米 米語
- ポ ポルトガル語
- ラ ラテン語
- ロ ロシア語
- 〔音〕 音楽
- 〔学〕 学生
- 〔軍〕 軍事・軍隊
- 〔経〕 経済・取引
- 〔古〕 古典
- 〔鉦〕 鉦物名
- 〔裁〕 和洋裁縫・服飾
- 〔児〕 児童
- 〔宗〕 宗教、特にキリスト教
- 〔女〕 女性
- 〔植〕 植物名・植物
- 〔心〕 心理
- 〔数〕 数学
- 〔生〕 生物・生理
- 〔俗〕 俗語・卑語・隠語
- 〔地〕 地名・地理・地質
- 〔哲〕 哲学・論理
- 〔天〕 天文・気象
- 〔動〕 動物名・動物
- 〔農〕 農業・畜産・林産
- 〔仏〕 仏教
- 〔文〕 文章語
- 〔方〕 方言

## 術語

- 〔法〕 法律・裁判
  - 〔まくら〕 まくらことば
  - 〔理〕 物理・化学
  - 〔料〕 料理
  - 〔歴〕 歴史・考古学
- 専門の学者だけがつかう、少数の専門語は特別に術語としてあつかい、「」印のかわりに「」印でつむ。たとえば、

## 記号

- ↓ を見よ
- ↑ から来た・の略語
- ↕ 参照せよ
- ↔ 反対語は
- ・ および・や
- ・ または
- ・ ( ) または
- ・ ( ) または
- 〔 〕 語源・字源・用字法などの説明のしるし
- 〔 〕 用語・用例の説明
- 〔 〕 当用漢字表にない漢字
- 〔 〕 当用漢字表にはあるが、音訓表にないよみかた
- 〔 〕 あて字・難訓など

## 標準アクセントの手引き

金田一春彦

## 一、標準語のアクセント

〔一〕 東京に生まれ、東京に育ち、いわゆる標準語を話す人に、食事に用いる「箸」という語を言わせてみると、必ずハをシより高く発音する。同じハンでも、川にかゝっている「橋」の時には、必ずハよりシを高く発音する。また同じツルでも、鳥の名の「つる」の場合にはツを高く言い、弓などの「つる」の場合にはルを高く言って、逆には言わず、動物の「かめ」と容器の「かめ」では、動物の場合には力を高く、容器の場合にはメを高くして、発音しわけける。このような、一つ／＼の単語について、どの部分を高く、どの部分を低く発音するか、というきまり、これが、その単語の**アクセント**と呼ばれるものである。

日本語には、元来、意味が全然ちがいながら音の同じ単語が不当に多く、全く同じではないが響が似通っている単語になると、きわめて数が多い。そうして、これらの単語が実際の会話において、どっちの意味であるかわかるのは、その単語のアクセントによるものが少なくない。この意味において、日本語のアクセントは重要な使命をもっていると言つてよい。

〔二〕 ところで、現在のところ、日本各地の方言のアクセントは、きわめてまち／＼である。現に、京都・大阪のような地方では、前にあげた、「はし」「つる」「かめ」の例についていうと、食事の「はし」の時にはシを高く、渡る「橋」の時にはハを高く、鳥の「つる」の時にはルを高く、弓の「つる」の時にはツを高く、動物の「かめ」はメを高く、容器の「かめ」は力を高く言う。つまり東京語と正反對である。そうかと思うと、仙台とか熊本とかいった地方では、アクセントのきまりが全然なく、食事の時の「はし」も、渡る「はし」も、鳥の「つる」も、弓の「つる」も、動物の「かめ」も、容器の「かめ」も、すべて同じ調子で発音する。

このように、アクセントが各地でまち／＼になっていることから、いろ／＼不都合が起ってくることは言うまでもない。現在、小学校を出たほどの人ならば、標準語で文章の書けない人は、ほとんどいないはずであるが、いざ口で話すという段になると、上方地方の人のことばが東京の人に取違えられたり、奥羽や九州の人のことばが、ほかの地方の人に通じなかったりすることがしば／＼起る。それは、それらの人々のアクセントが標準語式になっていない場合に多い。

〔三〕 もし、私たち同じ日本語を話して生活するものが、みな同じアクセントで話せたら、どんなによいであろう。少なくとも、必要に応じて、みんなが標準アクセントが使えるようでありたいと思う。この辞書において、ひとつ／＼の単語の下に、東京語のアクセントを示しておいたのは、こんな考えによるものである。これによって、ひとりでも多くの人が標準アクセントに熟達されるようになることを望んでやまない。現実の東京アクセントをそのまま日本語の標準アクセントとしたことについては問題もあるが、しばらく大勢に従うことにした。次節以下に、この辞書による標準アクセントの発音方法をのべよう。

## 二、この辞書におけるアクセント表記の方法

〔四〕 この辞書を開かれたら、一々の見出し語のすぐ下、漢字表記のすぐ上に、①②③…⑥のような、数字を○の中に囲んだ符号の存在に気づかれるであろう。これが、この辞書で示したその語のアクセントである。その見方は、手取り早くは、一八一—一九ページの「附表一」を一覧願いたい。詳しい説明は次の「五」「六」「七」に述べる。なお、次の(1)(2)…(6)の事項に注意されたい。

(1) 動詞・形容詞はその終止形のアクセントを掲げた。終止形以外の活用形のアクセントについては、三、特別の語形・助辞の類のアクセントの条の「九」を見られたい。

(2) 助詞・助動詞・接尾語など、常にほかの語の下について用いられる語のアクセントは、特別の取扱いを要するので、記号を変えて、(A)(B)…(Y)(Z)のように、ローマ字を○に囲んで表記した。



「影法師」 カゲボオシ・カゲボオシダ・カゲボオシガ・カゲボオシワ…

たゞし一拍の語で①と表記したものは、(第二拍がないゆえ)その語が高く発音され、助辞の類(助詞および助詞に準じる語)はすべて低くつく。「絵」「火」などはこの類で、

「絵」 エ・エダ・エガ・エワ…

のように発音される。

なお、助辞の類のうちには、時に例外的なアクセントをもつものもある。三の「一〇」の条を参照されたい。こゝに掲げた助辞は、すべて三の「附表四」において①と記載した類のものである。

②と表記した語は、第一拍は低く、第二拍が高く、第三拍以下は幾拍あってもすべて低く発音される。もし助辞の類がつけば、それらもすべて低く発音される。「心」「境」「中指」「おかあさま」「おまわりさん」などはこの例で、すなわち次のような形をとる。

「心」 ココロ・ココロダ・ココロガ・ココロワ…

「中指」 ナカユビ・ナカユビダ・ナカユビガ・ナカユビワ…

「おかあさま」 オカアサマ・オカアサマダ・オカアサマガ・オカアサマワ…

二拍の語で②と表記したものは(第三拍以下がないゆえ)第一拍は低く、第二拍が高く発音され、助辞の類はすべて低くつく。「池」「川」などはこの類で、

「池」 イケ・イケダ・イケガ・イケワ…

のようになる。一拍の語には②はない。

(註) 一拍の語には③④…はない。すべての一拍の語は、①か②かである。「附表一」を参照。

〔六〕 ③と表記した語は、第一拍は低く、第二拍・第三拍がともに高く、第四拍以下は、幾拍あってもすべて低く発音される。もし、助辞の類がつけば、それらもすべて低く発音される。「からかさ」「やまざくら」「とうもろこし」などはすべてこの例で、次のような形をとる。

「からかさ」 カラカサ・カラカサダ・カラカサガ・カラカサワ…

「やまざくら」 ヤマザクラ・ヤマザクラダ・ヤマザクラガ・ヤマザクラワ…

三拍の語で③と表記されたものは(第四拍以下がないゆえ)第一拍が低く、第二拍・第三拍が高く発音され、助辞の類は低くつく。「男」「表」などはこの例で、

「男」 オトコ・オトコダ・オトコガ・オトコワ…

のようになる。二拍以下の語には③はない。

なお、①②から類推すると、③の語は第一拍・第二拍がともに低く、第三拍だけが高そうに思われるかもしれないが、第二拍も第三拍とともに高く発音される点、注意を要する。現実の東京語には、「第一拍・第二拍がともに低く、第三拍だけが高い」というアクセントをもつ語は存在しないのである。④以上のアクセントについても同様で、たとえば第四拍が高ければ、第二拍も第三拍もそろって高く発音される。

(註一) 二拍の語には③④⑤はない。すなわち、すべての二拍の語は、①②③のいずれかである。

④と表記した語は、第一拍が低く、第二拍・第三拍・第四拍がともに高く、第五拍以下は幾拍あってもすべて低く発音される。もし、助辞の類がつけば、それらもすべて低く発音される。「渡し舟」しだれやなぎ」などはこの例で、次のような形をとる。

「渡し舟」 ワタシブネ・ワタシブネダ・ワタシブネガ・ワタシブネワ…

四拍の語で④と表記した語は、(第五拍以下がないゆえ)第一拍が低く、第二拍・第三拍・第四拍が高く、助辞の類はすべて低くつく。「弟」はこの例で、

「弟」 オトオト・オトオトダ・オトオトガ・オトオトワ…

のようになる。三拍以下の語には④はない。

(註二) 三拍の語には④⑤⑥⑦はない。すなわちすべての三拍の語は、①②③④のいずれかである。(註一)(註二)によって想像していただけると思うが、一般に④拍の語は、①②③④⑤⑥⑦のいずれかで発音される。「附表二」を見ていただきたい。

⑤⑥以上の記号の解し方は、すべて③④と同じ要領である。たとえば、⑤と表記した語は、第一拍が低く、第二拍から第五拍までが高く、第六拍以下およびこれにつく助辞の類は(もしあれば)すべて低く発音される。⑥と表記した語は、第一拍が低く、第二拍以下第六拍までが高く、第七拍以下お

よびこれにつく助辞の類はすべて低く発音される。「附表一」を見て理解していただきたい。

〔七〕 ①と表記した語は、第一拍が低く、第二拍以下は幾拍あってもすべて高く発音され、助辞の類がつけば、それらはすべて本来の形で発音される。「本来の形」とは個々の助辞によって異なるが、例えば一拍の助辞ならば、すべて高く発音されるとみてよい。詳細は〔附表四〕を参照。助辞の類がこのような本来の形で発音されるのは、①の語に限る特徴である。「牛」「竹」「うさぎ」「車」「友だち」「卵焼き」「むらさき色」などは①の例で、次のように発音される。

〔牛〕 ウシ・ウシダ・ウシガ・ウシワ：

〔うさぎ〕 ウサギ・ウサギダ・ウサギガ・ウサギワ：

〔友だち〕 トモダチ・トモダチダ・トモダチガ・トモダチワ：

〔卵焼き〕 タマゴヤキ・タマゴヤキダ・タマゴヤキガ・タマゴヤキワ：

一拍の語では、(第二拍以下がないゆえ) その語が低く発音され、助辞の類はすべて本来の形をとる。「柄」「日」などはこの例で、すなわち、

〔柄〕 エ・エダ・エガ・エワ：

のように発音される。

なお、動詞・形容詞の類にも①と表記したものがあり、「着る」「置く」「明ける」「笑う」「赤い」などがこの例である。これらは名詞の①と表記したものと大体似た性格をもつが、助辞の類がついた場合には、特別な形をとることがあるから「附表五」「附表八」によって理解していただきたい。

〔註一〕 ①の語の特徴は、助辞の類がついた場合のアクセントにあるので、単独の場合のアクセントには、別に特色がない。例えば二拍の語の①は、助辞のつかない場合には、二拍の語の②と全く同じである。三拍の語の①は、助辞がつかなければ、三拍の語の③と全く同じである。

〔附表一〕を参照されたい。

〔註二〕 これら①のアクセントは、他の②③④のアクセントと区別して「平板型」と呼ぶことがある。これに対して①②③のアクセントは「起伏型」と呼ぶことがある。

〔八〕 以上〔五〕―〔七〕を総合して、①②③④および①の表わすアクセントの型を集めて整理・排列すれば〔附表一〕のようになる。⑦⑧以上の型もこれによって類推していただきたい。